飛梅

令和四年
春号

一般社団法人 心游舎 総裁
彬子女王殿下 御寄稿
飛桜に思いを寄せて

神縁連歌

太宰府天満宮崇敬会福島支部
副支部長 関根英樹 執筆

飛梅 令和4年春号　第202号　令和4年3月25日　太宰府天満宮社務所発行

表紙：撮影 三迫太郎　デザイン 前田景

聖地・菅聖廟

太宰府天満宮の由緒

太宰府天満宮は学問・文化芸術の神様と仰がれる菅原道真公（菅公）が永久にお鎮まりになる御墓所の上に御社殿を戴き、日本で唯一「菅聖廟（かんせいびょう）」と称えられ、天神信仰の聖地として一千百余年もの長い歴史を経て今日まで大切に守り伝えられております。

延喜三年（九〇三）二月二十五日、菅公は配所の地大宰府の南館（榎社）において五十九年の御生涯を閉じられました。御遺言により御亡骸は大宰府の地に葬られることになり、牛車に奉戴し東北の方角に葬列を進めていたところ、俄かに牛が臥して動かなくなり、これが菅公の思し召しであろうとこの地に埋葬し、祠廟が建立されました。続いて延喜十九年（九一九）勅命により御社殿が造営され、以後幾度となく勅使が差遣されるなど、皇室の御崇敬を集めるところとなりました。醍醐天皇は御生前の忠誠を追想され、延長元年（九二三）にもとの官職に復され、一条天皇の正暦四年（九九三）には正一位左大臣、さらに太政大臣を贈られ、「天満大自在天神（天神様）」と崇められることとなりました。

天暦元年（九四七）、菅公の孫にあたる菅原平忠が当宮の別当職に任命されてより、代々菅原家の子孫に祀職が受け継がれ、現在は菅公から数えて第四十代目の末裔（宮司）により祭祀が厳修されています。現在の御本殿は、天正十九年（一五九一）筑前国主小早川隆景の寄進により造営され、桃山時代の豪壮華麗な様式を今に伝え、国の重要文化財に指定されています。

菅公は平安時代随一の学者・文人・政治家として、その類稀な才能を発揮され、我が国の発展と文化興隆に多大な御功績を遺されました。『日本三代実録』『類聚国史』の編纂や遣唐使の廃止をはじめ、それまでの社会構造を見直し、日本人としての自覚を呼び起こす道を拓かれました。学問、詩歌、書道、歌舞伎など、日本文化の神髄をなす数々の分野において、菅公は至高の存在として今もなお尊崇されておられます。また、大宰府左遷後の不遇の境地にあっても、常に皇室の弥栄と御国の平安を一心に祈られ至誠一貫清らかな御生涯を全うされました。日本人が理想としてきた生き方や価値観、御国が向かうべき道を示された菅公は、古より現代に至るまで私達の心に寄り添いお見守り下さっています。

「さいふまいり」という言葉に表されるように、菅公の御神徳を慕い訪れる人々の波は途絶えることなく、今では「アジアの学問の神様」とも称され、国の内外より多くの人々が参拝に訪れ、真摯な祈りが捧げられています。

菅原道真公 一千百二十五年 太宰府天満宮 式年大祭

当宮では菅公に縁が深い「二十五」という数に因み、毎月二十五日の月次祭をはじめ、二十五年毎に節目となる重儀の祭祀を斎行し、御神霊をお慰め申し上げるとともに御神威並びに天神信仰のさらなる発揚を繰り返してまいりました。来る令和九年（二〇二七）は、「菅原道真公一千百二十五年 太宰府天満宮式年大祭」を迎え、御本殿・廻廊・楼門の大改修をはじめ、天神の杜の保全など様々な環境整備事業を予定しております。

天神様が永久にお鎮まりになる聖地として、未来へ向け益々の御支援・御協力を賜りますよう、何卒御高配の程宜しくお願い申し上げます。

春の便り

太宰府天満宮 宮司
西高辻 信宏

謹んで皇室の弥栄と御国の平安をご祈念申し上げますと共に、氏子崇敬者の皆様のご多幸を衷心よりお祈り申し上げます。

当宮の境内には、道真公を慕い、京より飛来してきたといわれる御神木の飛梅をはじめ、約二〇〇種類・六〇〇〇本の梅の木がございます。今冬は寒さが続いた影響で、梅の開花はやや遅れましたが、例年より長く楽しむことが出来ました。梅は中国原産と言われ、諸説ありますが、遣隋使・遣唐使らによって日本に伝えられ広まったようです。大宰府は大陸との交流の要所で、いち早く文化・文物がもたらされる場所でもあり、大宰帥であった大伴旅人が天平二年（七三〇）、当時珍しかった梅を題材に歌を詠む梅花の宴を催すなど、この地は古より梅との深い縁がございます。

そして、ご祭神菅原道真公もまた、梅をこよなく愛されました。五歳で詠まれた和歌をはじめ、辞世の詩となった漢詩に至るまで、ご生涯を通して梅を題材に数多くの詩歌を残されています。それらを読み解いて参りますと、時に梅を星や雪に見立て、時に同志のように語りかけ、悲喜交々梅に想いを託しておられ、まさに梅は道真公にとって、特別な存在であったことが窺い知れます。

このように御縁木である境内の梅を、毎年一月から二月にかけて梅の親善使節として各所へお届けしております。太宰府から一足早い春の便りを届けるこの使節は、昭和三十一年の北海道梅の使節より始まりました。当初は梅の鉢のみをお贈りしておりましたが、第十二回より神職や巫女が直接訪問するようになりました。平成十一年からは、青森県への梅の使節も始まり、まだまだ雪深く寒さ厳しい時期に、凛とした花を咲かせる梅の鉢を手ずからお届けすることで、すぐそこまで来ている春の訪れを感じていただいております。現在では、北海道千歳市と青森県から、すずらんの使節、りんごの使節が毎年それぞれの地域の季節の便りを、太宰府に届けてくださっています。

また東京梅の使節では、亀戸天神社、湯島天満宮、東京福岡県人会等をはじめ、首相官邸へ梅をお届けしています。本年は新型コロナウイルス感染症の感染が拡大する中での訪問となりましたが、このような状況だからこそ、梅花をご覧になった方の心が少しでも晴れやかになっていただけるようにという思いで各所へ赴きました。首相官邸にお届けした紅白の梅は綺麗な花を咲かせ、芳しい香りを放ち、岸田首相は「心が落ち着き、安らぐ時間になった」と大変お喜びいただきました。

長い歴史を持つ梅の使節が続いておりますのも、今まで相互に積み重ねてきた交流があってこそだと思います。今後もこの絆を大切に繋げ、友好の輪が益々広がりますことを心より願っております。

これから、境内は樟が若い葉へと命を繋ぐ、一年の中で特に美しく生命力に溢れた新緑の季節を迎えます。神社の役割として、美しい自然に触れて心身を整えていただくことが重要なことだと感じます。不安定な状況が続く昨今でございますが、神社が心の拠りどころとなりご参拝の皆様に元気になって帰っていただけるような神域づくりに取り組んで参ります。

飛桜に思いを寄せて

一般社団法人 心游舎 総裁　彬子女王

「さくら花主をわすれぬ物ならば吹き来む風に事づてはせよ」

菅原道真・後撰和歌集

菅原道真公の「東風吹かば～」の和歌はあまりにも有名だが、桜の木にも思いを託されていたのに、こちらの和歌はそれほど知られてはいない。梅は太宰府まで飛んで行ったけれど、桜は飛ばなかったからだろうか。梅が飛んでしまったから、桜は飛びづらくなったのか、梅が飛んだ分、桜は残って主が去った場所を守ろうとしたのか、真相はわからないけれど、道真公が梅も桜も同じように愛しておられたことは、この二首の和歌から伝わってくる。

私は、梅も桜も好きだけれど、咲き出すと心がざわざわして落ち着かなくなる。それは大好きな冬が終わるという兆しだからだと思う。冬生まれでお印は雪、予定に隙間があったらすぐにスキーに行こうとする私は、雪が降ったらご機嫌で、毛糸の帽子をかぶって散歩に行くし、雪上に出たら風邪もいつの間にか治っている。だから私は、一年の中で三月が一番苦手である。雪が解けてスキーができなくなるという焦燥感に駆られるのはもちろん、情緒不安定になり、体調も崩しやすくなる。それは、三月が別れの季節だから。宮家職員や警察など、毎年人事異動で誰か必ず去っていく。子どもの頃から何度繰り返しても、これだけは慣れない。それが一生の別れではないことも、四月には新しい出会いが待っていることもわかってはいるけれど、いつも三月は心を乱れさせる何かが起こるのである。

そんなことを知ったパティシエの友人が、「彬子様が春を少しでも好きになるように」とあるお菓子を作ってくれた。彬姫桜という私の名前がついた桜をモチーフにした繊細な桜色のパイ。花びらは、淡い桜色から白のグラデーションになっており、中には蓮の実の餡と桜の餡が包み

お菓子の彬姫桜

込まれている。一口かじるとほろほろと崩れ、餡の甘さと塩漬けの桜の塩味、油で揚げたさくさくしっとりしたパイとのバランスが絶妙である。こんな思いがこもったお菓子を私は今まで食べたことがない。パイを飲み込むのと同時に、春の切なさがふわりと飛んでいくような気がした。

このお菓子のモチーフとなった彬姫桜は、今竈門神社に植えられている。京都の桜守で知られる佐野藤右衛門さんが育てられた新種の桜で、私がたまたまお花見に訪れたときに一気に花を咲かせたことから、「お名前頂いてよろしいやろか?」と藤右衛門さんに言われ、名付けられた桜である。咲いたときはあざやかなピンク色だが、夕方には藤右衛門さん曰く「化粧落とし」をして白っぽくなる八重の桜。雄しべが変化し、花びらになったという旗弁があるのが特徴で、かすかに甘い香りがする。早咲きで、三月半ばには見頃を迎える、華やかでかわいらしいこの桜の開花のお知らせは、冬が終わるという引導を渡されるのと同時に、「きれいに咲いているから、元気を出して見に来てね!」とエールをもらっている気持ちになる。近年は、二つの彬姫桜のおかげで、少しだけ春をおだやかに乗り切れるようになったような気がしている。

コロナ禍でなかなか遠出ができない私の代わりに、京都から太宰府に飛んで行ってくれた彬姫桜。飛桜を見るたびに、太宰府の家族は姫を思い起こしてくれるだろうか。

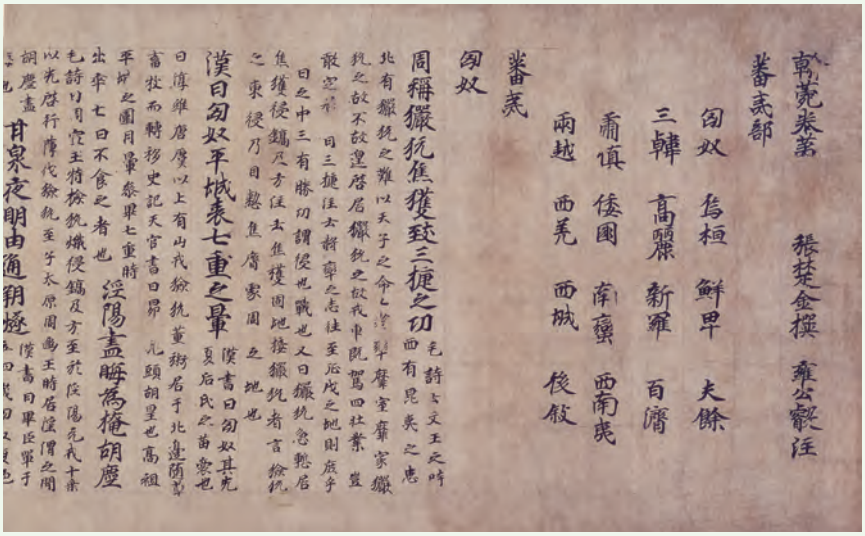
竈門神社の彬姫桜

彬子女王

寛仁親王殿下の第一女子として誕生。学習院大学を卒業後、オックスフォード大学マートン・コレッジに留学。日本美術を専攻し、海外に流失した日本美術に関する調査・研究を行い、二〇一〇年に博士号を取得された。女性皇族として博士号の取得は史上初のことである。子どもたちに日本文化を伝えるために、ご自身で一般社団法人「心游舎」を創設、総裁に就任され、全国各地でワークショップなどを行われている。

国宝『翰苑』を取り巻く9つの謎（上）

顧問　味酒　安則
（文化研究所主管学芸員）



『翰苑　巻第卅』冒頭部分

太宰府天満宮所蔵の国宝『翰苑』は、古代中国その周辺、東アジアの国々の情勢、その中に日本の歴史、風俗を記した類書（諸本から採録し、編集したもの）に属する書籍である。書写年代は、平安前期九世紀を下らないという。楮紙二十八紙に墨書、巻子仕立てで、縦二七・六センチ全長一五八五センチの法量である。中国唐代顕慶五年（六六〇）に、張楚金が孔子と夢想で語らい感得し書き上げ撰述した類書で抄本（抜書きしてつくった手書きの本）である。

唐一代の歴史を編んだ『旧唐書』の末尾に、「著翰苑三十巻」とある。寛平三年（八九一）頃に成立した漢籍の総目録で、藤原佐世（菅原道真公の女婿）の撰修による『日本国見在書目録』にも「翰苑三十巻」と記されていることから、平安前期にはわが国に伝来していたことが判る。

本巻の内容は、蕃夷部で匈奴・烏桓・鮮卑・夫餘・三韓・高麗・新羅・百済・粛慎・倭国・南蠻・西南夷・両越・西羌・西域の中国周辺の国々を対象としている。

この伝本（今に残る写本）は、書名だけが文献に残り、実物はその所在が伝わっていない書物（逸書）を含む。『魏略』『括地志』『高麗記』『職貢図』など、逸書とよばれるものからの引用があり貴重といえる。しかし、中国では南宋の時代には、この『翰苑』もすでに多くが散逸したらしく、当宮の伝本が現存する唯一の古写本の孤本（ただ一つの伝えられた本）になったのである。尚、巻末に後序（本の末尾の跋文、あとがき）がある。

一、唐本なのか、国書なのか

唐代の張楚金が撰述した類書は唐本であるが亡失。伝本は、平安時代の古写本で抄本にあたる。中に、書写されている文字に「職」がある。現在は「職」と表記されるが、明治維新までは「職」だった。仕事は、身体でするものか、指示を聴いてするのかの概念の相違で、日本人の書写とみる。その他、誤字や脱文が多いことを理由に国書として扱われている。平安初期、遣唐使及び関連の人の書写ともいわれている。

二、誰が、何時、書写したのか

太宰府天満宮では、大鳥居家（宮司西高辻家）の家伝として、平安末期から鎌倉前期にかけての公卿で、正二位参議、大蔵卿を勤めた菅原（高辻）為長の染筆によるものと伝えられてきた。しかし、大方の研究者は、楮紙に墨界を施して、一紙に二十二行及至二十三行、一行に十六～十七字詰に墨書し、割註の細字は一行二十二～二十三字詰の仕様が、平安初期、即ち九世紀を下らないという。しかし、京都帝国大学の湯浅幸孫教授は、「唐代の書籍の中に、雍氏の名前が見えないことから、『雍公叡』は宋人と見られる。伝本にその雍氏の名があることから、

平安後期以後の書写であろう」と提言している。

三、伝本は第何巻にあたるのか

この伝本の後序によって最終巻であると考えられる。唐一代の歴史を記した『旧唐書』では「著翰苑三十巻」とあるが、『新唐書』藝文志は『翰苑七巻』とし、すでに差異がある。わが国の『日本国見在書目録』は、貞観十七年（八七五）の冷然（泉）院の火事を契機に編修されたもので、『旧唐書』の完成が開運二年（九四五）なので半世紀ぐらいは早いことになる。それにより、伝本は『翰苑巻三十』の最終巻とするが、『翰苑巻七』の説を唱える研究者もいる。

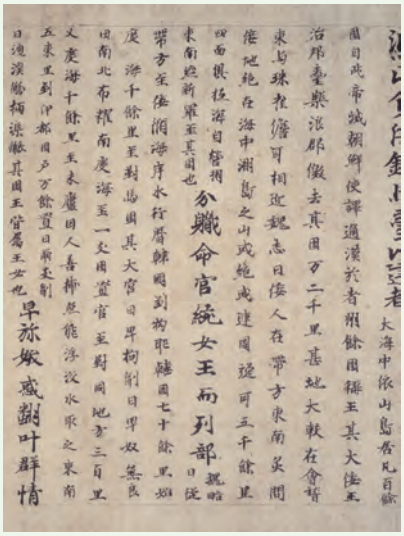
四、伝来したのは全巻か、現存する一巻か

淳和天皇の勅命で滋野貞主が撰修した『秘府略』に『翰苑』の逸文（部分的に残る文章）が引いてあるので、数巻は伝来したとも考えられるが、「倭国」を含むこの伝本だけが伝来したという研究者もいる。

太宰府天満宮では、遣唐使が帰朝の途中、時化に遭いこの巻だけを大事に持ち帰ったと伝わる。

五、本文と註の成立に年代差はあるのか

類書の場合、註は字句の解釈ではなく、文献の根拠を示すことが目的である。したがって、本文と註の筆者は同一人物といえる。雍公叡の名は『宋志』藝文志に施註者とあるが、その註は後世の極わずかのものであろうとも考えられる。



「分職」の記述

六、施註者は誰なのか

前述のように、施註者は「張楚金」となる。張楚金のことは、『旧唐書』や『新唐書』に見え、宋代初期の『大平廣記』にもあまり知られていない話が散見するという。また、『全唐詩』及び『全唐文』に詩文が所収されているようだ。張楚金は『魏略』をはじめ多くの逸書（書名はあるが実物の所在が不明なもの）など、参考文献を目にできる立場の人、富裕な学者だったと考える。

七、誤字や脱文が多い理由

遣唐使の仕事の重要なものが、中国での書籍の購入と書写だった。限りある時間でできるだけ多く本を書写する、『翰苑』もそのひとつと考えられる。また、平安時代の学問の基盤は「書写音読」である。数少ない舶来の中国書籍を書写することが勉学だった。伝本は遣唐使をはじめとして幾人かの筆写を重ねていると思われる。文章の結びにある「之」、「之也」、「之者也」等の助字は、字配を意識したもので、前項を裏付けるものだ。

実は『翰苑』は、唐代において華美な文辞と典故のある語句を多用する「駢儷体」と「対句」を学習する学生のための教本でもあったという学説がある。菅家が指導した「文章道」の基軸と同様といえる。『翰苑』は、『論語』や『蒙求』と同じく「書写音読」のための学生の教本だったと考えるところである。

八、何故、太宰府天満宮に保管されていたのか

大正六年（一九一七）、黒板勝美博士が、太宰府天満宮宝物調査の際に確認（再発見）された。『翰苑』は留守別当大鳥居家（現西高辻家）に伝えられていた。『翰苑』が太宰府に将来した要因は四つ考えられる。

先ず、太宰府天満宮の御祭神菅原道真公が文道の神として崇拝されていた。維新前奉納は宿坊を取次とした。そこで、宿坊延寿王院（大鳥居家）に納まった。

次に、前掲の菅原（高辻）為長の子、長円が安楽寺（太宰府天満宮）別当に寛元元年（一二四三）に補任されている。しかし、鎌倉時代になると、別当は着任せず、留守別当に委任しているのである。

さらに、延宝四年（一六七六）、社家の検校坊味酒快鎮が、「御文庫」を創設し、徳川光圀、林大学頭信篤はじめ全国から総数三五〇〇冊の寄贈があった。この太宰府が書府として興隆した時代に「翰苑」も将来したと考えられる。しかし、同年作製の『天満宮御文庫書籍寄進帳』に『翰苑』の名はない。

そして、宝暦四年（一七五四）、大鳥居家は桃園天皇の勅願で「延寿王院」の院号を賜り信貫の代から清僧となる。清僧は妻帯ができないので、京都の高辻宗家から猶子がみえる。前出の菅原為長は高辻家の平安末期の当主である。江戸時代後期、信賢、信廉、信観、信全の四代が、猶子として太宰府入りをされている。その時に、先祖の書物を持参品として持ってみえた、とは考えられないだろうか。

九、何故、国宝に指定されたのか

『翰苑第卅一巻』とし、書跡・典籍の分野で、昭和二十九年（一九五四）国宝指定された。

国宝となった理由は、先ず、書名だけが文献に残り、実物はその所在を失って伝わらない書物の、唯一の伝本で孤本であるということである。

次に、『三國志』魏書に先行する魚豢の『魏略』、唐の李泰の『括地志』、撰者・成立等不明の『高麗記』等の貴重な逸書を引いていること。これは『翰苑』が類書のもつ百科事典的性格によるからである。

さらに、わが国にとっても、『魏略』は『魏志倭人伝』の種本として合せ読むべき文献で、その逸文は『魏略輯本』にも採録されていない。倭国の条において、邪馬台国や金印、その綬（緒・組ひも）の色が「紫」であったこと、聖徳太子の制定した冠位十二階のうち、大徳を「麻卑兜吉寐」と訓んでいたことなどが確認できる貴重な文献史料といえる。

（つづく）

第三回　小野照崎神社　～太宰府天満宮との御縁～

天神さまを巡る

小野照崎神社　権禰宜　小野　亮貴

東京は下町入谷に鎮座します当社 小野照崎神社の創建は、八五二年（仁寿二年）上野照崎の地に住民が御祭神である小野 篁（たかむら）命を奉斎したのが起源とされます。江戸期に寛永寺の建立に伴い現社地である入谷の地に遷座、その後、回向院より菅原道真命 自刻の尊像をお迎えし、御配神として相殿でお祀りをしております。渡江（わたらい）天神として「江戸二十五天神」の一つに数えられ、社紋も御祭神 篁公の御神紋である左三つ巴に御配神であります道真公の梅鉢を合わせた「左三つ巴に梅鉢」という珍しいものになっています。

「関東大震災」「東京大空襲」という二度の大禍を免れ、本殿前面の彫刻や狛犬、賽物箱など江戸期のものが多く残っており、本殿横に聳える下谷坂本富士は、約二百年前に富士の溶岩石を運んで模られた富士塚で、国の重要有形民俗文化財にも指定されております。

お近くにお越しの際には是非お立ち寄り頂き、親しくご参拝を頂ければ幸いです。

御祭神 小野 篁公 ～学問・芸能・仕事の神様～

御祭神である小野篁公は平安時代初期を生きた実在の人物でもあります。漢詩では日本の白楽天と称され、和歌も参議篁（さんぎたかむら）の名前で百人一首にも撰されるなど歌人としても活躍。能書家であり文筆にも優れ、絵画でも日本初の画人伝である狩野永納の『本朝画史』のはじめに「博学広才にして人の及ぶところではない。その画（絵）は神に至る」と記されており、その多彩活発なる活躍ぶりからか、夜な夜な冥府で閻魔大王の副官として裁きを行っていたという冥界伝説など、その傑出した才を示す逸話が多く残っています。

道真公と篁公の数奇なご縁

御祭神の小野篁命と相殿でお祀りする御配神 道真命は、生年こそ約五十年の違いはあれど、同じ平安初期を生きた実在の方ということで繋がりも深い間柄。

道真公の父である菅原是善（これよし）公とは同じ東宮学士（皇太子付きの教育官）として篁公と同時期に任ぜられ、互いの才を認め合って深く交流をしていたという記録が、正史『日本三代実録』に残されていたりと、篁公の御孫達に至るまで多くの関わりが見受けられます。

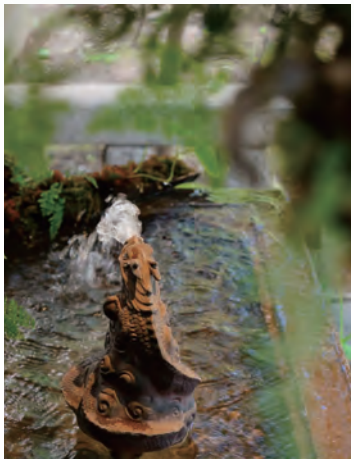
御孫の一人である小野美材（よしき）は、当時傑出した詩文・能書の達人とされた人。道真公の漢詩集である『菅家文章（かんけぶんそう）』には、

若かりし学生の美材に向けて、その並外れた才を伏龍に例えて称え、学問の励行を促す詩文が残されています。

その後、三筆と並んで内裏西側三門の扁額を奉ずるなど、その才能を開花させますが約四十歳の若さで早逝。大宰府の地で美材の逝去を知った道真公は「真の詩人、書の達人を失った。これで詩文の文化は衰えてしまうだろう」と歎き悲しんだと『菅家後集』に残ります。

大宰府政庁と小野氏

また、和様の書の開祖とされ、書の三蹟と称される小野道風も篁公の御孫にあたります。書道の指導書であり、日本の書法や書道史を体系的に論じた初めての本である『入木抄』では「聖廟以後野道風相続す。此の両賢は筆体相似たり」とも記述され、道風は道真公の書法を継承し、和様の書を開いたとも考えられていたようです。



現在も観世音寺の宝蔵には道風書の扁額が納められていますが、古代小野氏は初代遣隋使である小野妹子から続く外務外交が家職、外交窓口であった大宰府とは深い関わりがありました。小野妹子の孫である毛野の大宰大弐 初任から、幾代にも渡り、十余名もの小野氏が大宰府政庁の実務長官である大宰大弐や小弐を務めています。

太宰府天満宮とのご縁

中でもとりわけ太宰府天満宮とのご縁が深いのは、道風の兄である小野好古です。武官として藤原純友の乱を鎮圧し、大宰府の防衛に成功します。その後、天徳二年(九五八年)大宰大弐となった好古によって、宮中での道真公の往時を偲んで太宰府天満宮「曲水の宴」が創始されました。

好古の父葛絃が、道真公が流刑に処された時の大宰府の長官(大宰大弐)であった という奇縁も、好古を大きく後押しをしたことでしょう。長官という立場にありながら深いご縁のある道真公をお助けすることが出来なかった父の無念も受け継いで、道真公の御霊をお慰めしようと考えたのではないでしょうか。

その後も、好古は七十七歳という高齢にもかかわらず「菅公の下で眠りたい」と三度目の大宰大弐の任を受託し、三年後の康保元年(九六四年)には『秋思詩』になぞらえた「残菊の宴」を創始しました。

また、好古は自らの血脈である小野伊勢・小野加賀・小野但馬の三家を太宰府天満宮の神官として任命するよう奏請。この三家は神職家として境内に居を構え、明治の寺社制度の変革期まで和歌・漢詩・連歌など、代々文芸をもって奉仕していたと伝えられています。

幾代にもわたり、数奇な繋がりがもたらされた篁公と道真公。

今も太宰府天満宮では往時をしのび「曲水の宴」「残菊の宴」が執り行われています。

私が太宰府天満宮でご奉仕の機会を頂いてから早十年。二年間という短い間でしたが、太宰府の悠然と流れる時間の中、菅公の御前で頂いた多くのお導きは、この二柱の神様にお仕えする神職としてのかけがえのない基となっています。

小野　亮貴（おの りょうき）
小野照崎神社　権禰宜
國學院大學神道文化学部を卒業後、平成二十二年四月から平成二十四年三月までの二年間、太宰府天満宮で奉仕。同年四月より小野照崎神社を本務とする。
東京都神社庁 祭祀舞講師・神社本庁 祭祀舞講師補・國學院大學非常勤講師・小野雅楽会 副会長

菅家の言ノ葉 詩歌の世界（三）

権禰宜　味酒安儀

若き菅原道真公が、勉強して目指すのは大学（寮）への入学でした。これは、当時の律令制を円滑に運営するための官史の養成機関です。式部省の下にあり、教科は、紀伝道、明法道、明経道、算道の四道を中心に、その他複数の学科がありました。十日毎の試験である「旬試」や「帖試」と呼ばれる定期試験もあり、これには中国古典の文章の丸暗記が要求されました。貞観元年（八五九）元服された道真公に最初の関門がやってきます。「文章生試」といい、大学、それも紀伝道（文章道）の入学試験です。受験に向けて、父是善や個人教授の島田忠臣は道真公に詩作を幾度となく課し、毎日のように模擬試験を行いました。この頃の道真公の御心が、七言律詩で詠まれています。

「臘月獨興」　于時年十有四。

玄冬律迫正堪嗟　玄冬律迫めて正に嗟くに堪へたり
還喜向春不敢除　還りては喜ぶ春に向なむとして敢へて除ならざることを
欲盡寒光休幾處　盡きなむと欲る寒光幾ばくの處にか休はむ
將來暖氣宿誰家　來りなむとする暖氣誰が家にか宿らむ
氷封水面聞無浪　氷は水面を封じて聞くに浪なし
雪點林頭見有花　雪は林頭に點じて見るに花あり
可恨未知勤學業　恨むべし學業に勤むことを知らずして
書齋窓下過年華　書齋の窓の下に年華を過さむことを

冬の日も残り少なく、月日の過行く速さはいくら嘆いてもなげききれない。
しかし一方で、春が再び巡ってくることを思えば嬉しいことでもある。
冬の太陽は、次の冬までどこで休むのだろう。
春の暖かさは、今頃どこに宿っているのだろう。
今はまだ、水面は氷に閉ざされて浪の音も聞こえず、
雪は木の梢にかかって花のようにも見える。
嘆かわしいことだ、学業に精も出さずして、
ただ書斎に閉じ籠るのみで、うかうかと年月を過ごすことは

早や十四歳で詠まれたこの漢詩の中に、紀伝道を修める菅家の学問の核心の一つである「対句」が多用されています。中篇の「尽きんと欲する寒光」と「来らんとする暖気」それに、後篇の「氷は水面」と「雪は林頭」が対句を成しています。対句は麗句ともいい、中国では六朝から唐の時代に流行した修辞法の一つで、日本では平安時代前期に盛んになりました。また「尽きんと欲する寒光～誰が家にか宿る」の二句は、唐の詩人李白の詩作である「春夜桃季の園に宴するの序」の中の「天地は万物の逆旅（宿）にして、光陰は百代の過客（旅人）なり」を学習し模範とされているとも言われています。

道真公の寸陰を惜しみ勉学に取り組むお姿が目に浮かびます。そして、文章生試は、貞観四年（八六二）四月十四日に実施され、翌月十七日に見事に及第（合格）されました。御歳十八は、歴代の及第者の中で最年少で、『菅家伝』には「世以て早しとなす」と記されています。

次に、その紀伝道の文章生二十二人のうち成績抜群の者二名を選んで文章得業生とし、国家試験の頂点である「方略式（策）」を受験させる候補生とします。この候補生の事を「秀才」と呼びました。道真公は、貞観九年（八六七）二十三歳で文章得業生になられていますが、この頃について「吉日長十六韻」には「友とのお喋りも絶ち。妻や子と親しむこともやめていた」と回顧しています。道真公は貞観十二年（八七〇）二十六歳で、学者を目指す者として、名誉の方略試を受験されました。その時の策問は二題で「氏族を明らかにす」と「地震を弁ず」です。道真公は見事に及第（合格）と判定されました。律令時代の奈良から平安前期の約二三〇年の間に、この試験に合格した文章得業生は、わずかに六十五人だけだったのです。

※参考文献　『菅家文草 菅家後集』川口久雄校注 岩波書店
『菅家の文華』清藤鶴美著　太宰府天満宮

「献詠集」について

「文化芸術の神様」に捧げる誠心

投稿いただいた献詠献句は優劣を競うものではなく、天神さまをお慰めし、道の隆昌を願ってご神前に奉納させていただくものです。皆さまの「誠心」を唯一菅聖廟、太宰府天満宮へお捧げください。

兼題　**締切**
四月「夕」　**毎月二十三日必着**
五月「夜」　**（十二月のみ十五日）**
六月「問」

自作未発表、神前奉納にふさわしい作品でお願いいたします
年初穂料　一、〇〇〇円
翌年一月「献詠集」をお送りいたします際に同封の、お振込用紙でご神納ください

葉書の書き方（例）

お問合せ　太宰府天満宮献詠係
〒八一八―〇一九五
太宰府市宰府四―七―一
〇九二（九二二）八五五一

天神さまの御縁 68

少弐氏初代 武藤資頼

村田 眞理

十二世紀の足音がそこまで近づいていた頃、世の中が一変しました。“奢る平氏は久しからず”、平氏から源氏へと政権交代が行われ、鎌倉に幕府が開かれたのです。

平安時代末期、平氏政権の重要財源だった日宋貿易の拠点として重きをなしていた大宰府は、平氏の力が大きく蔓延り、安楽寺天満宮とよばれていた当宮も例外ではありませんでした。当時の別当は平清盛と近い安能という人物でした。

清盛の死後、とうとう都落ちした平氏が西下して頼ったのも、また大宰府でした。『平家物語』では、再起を図って安楽寺天満宮に参詣した平氏一門のエピソードが綴られています。

鎌倉幕府の成立によって、必然、大宰府もそれまでとは違う世情となりました。

九州を統べていた大宰府政庁は鎌倉幕府の政権下となり、新たな機関が設けられ、配下の御家人が派遣されます。その御膝元で、当宮も新政権の影響を大きく受けていきます。鎌倉幕府が大宰府に置いた初期の機関やその長の変遷には諸説ありますが、何人目かの長に任じられたのが武藤資頼です。

武藤資頼が鎌倉幕府の任で九州に下向したのは一一九五年以降と思われます。大宰府に宰府守護所を置き、筑前・肥前・豊前三国の守護職を兼ねました。しかし資頼は、元々は源頼朝の御家人ではなく平氏側の人だったのです。

資頼は、永暦元年（一一六〇）に生れ、父は武藤頼平、武藤氏は武蔵の武士でした。平氏の家人だった武藤氏は、平氏政権に源氏が反旗を翻した時には平氏方として参戦しました。

資頼の運命が一転したのは、一ノ谷の戦いでした。源義経軍によるまさかの奇襲攻撃によって、平氏軍は命からがら敗走することとなります。「義経の逆落し」や「敦盛」のエピソードなど、一ノ谷の源平合戦は、後に語り継がれ、物語や能などになった劇的な戦いでした。

平氏軍として参戦した資頼は、負け戦と察するや知人だった梶原景時を頼って投降し、源氏に捕らわれの身となり三浦義澄の預かりとなります。平氏を見限って源氏に下った資頼でしたが、この二人に縁があった資頼には運がありました。

梶原景時は、元は平氏側の武士でしたが、頼朝が挙兵した当初、平氏側に破れて逃げた頼朝を見逃して助け、その後頼朝に付いて信頼を得た御家人で、鎌倉幕府成立後、頼朝の元で権勢を振るっていく人物です。また三浦義澄は、頼朝が挙兵したときからの臣で、二人とも、頼朝死後、二代将軍の代に合議制となった際には十三人の一人に数えられています。

捕らわれの資頼を一線に蘇らせたのは、教養深かったことといわれます。故実に通じていた資頼は、頼朝嫡男頼家の元服に際してその素養が頼朝の目に留まり、鎌倉幕府で活躍の場を得ることになったというのです。

頼朝のもとでの資頼の動向については、記録等がほとんどなくよくわかっていませんが、資質があり信頼を得ていたのでしょう。交易・外交の要で九州を治める大宰府に幕府の役人として赴任することになったのです。いまだ平氏勢力もあり在地の武士も多い九州では、資頼の経歴を考えると、さぞ困難なことが多かったことは想像に難くありません。

そんな中、資頼は鎌倉幕府の九州拠点を形成することに尽力し、嘉禄二年（一二二六）には大宰少弐に任じられます。大宰府政庁の古代からの官職である少弐の官に鎌倉幕府の御家人が任じられたのは初めてでした。この後、大宰府の在地執行職である少弐の官は、代々資頼の子孫が任じられることになり、武藤氏は少弐氏と呼ばれるようになっていきます。

数少ない史料として、安貞元年（一二二七）、博多で倭寇の悪徒を高麗使節の前で処罰した記録が残ります。隣国との外交に対処する大宰府の重要な役目も、資頼の肩にかかっていたのでした。後に中国の元が攻め込んで来たいわゆる元寇の時も、果敢に対処したのは資頼の子孫、少弐の者たちだったのです。

資頼は大宰府の地に根を下ろし、在地化してこの地で一生を終えます。おそらく、当宮にも参じ天神様に祈りを捧げていたことでしょう。

資頼が亡くなったのは安貞二年（一二二八）、六十九歳でした。大宰府の地、観世音寺の子院だった安養寺跡に、その墓と伝えられる五輪塔があります。

安養寺跡五輪塔

神縁連歌

令和四年二月二十三日発句
令和四年二月二十五日奉納

賦初何連歌

初折表

発句　初空や打つ手あまたの文の宮　信宏　新年
脇句　木綿垂揺らし春永の風　彰弘　新年
第三　ゆくりなく笛の音しじま切り裂きて　弘子　雑
第四　遠き島山雨にけぶれる　康利　雑
第五　おのおのを霧や距てむ舫ひ舟　良三　秋
第六　宿りの庭に萩こぼれ咲く　由季　秋
第七　旅衣いざよふ月の照らすまま　史子　秋
第八　刈田の道に松虫の声　喜代志　秋

初折裏

一　ここそこに餌を啄む群雀　睦　雑
二　香も仄かなる気の流れつつ　君子　雑
三　階浄めはづす襷に人を待つ　祥子　雑
四　かなはぬ逢瀬今は忘れむ　正純　雑
五　白雪にひちてかはかぬ袖の露　純一　冬
六　戻る当てなき蝦夷の左遷　宜博　雑
七　天離る鄙にもなれて犬を飼ふ　隆子　雑
八　友来たりなばさびしかるまじ　仁美　雑
九　やうやうと消ゆる送り火眺め遣り　彰弘　秋
十　月の出暗く野面揺れけり　良三　秋
十一　泊り船舳先のさきの秋寒し　喜代志　秋
十二　浮御堂には阿弥陀坐します　弘子　雑
十三　咲き満ちて山を覆へる花の雲　君子　春
十四　たどる古道霞たなびく　史子　春

神縁連歌会として初めての二月二十五日奉納

天神さまの御命日でもある令和四年二月二十五日、連歌奉納披講を行いました。

昭和六十二年より活動を開始した神縁連歌会は、平成二十四年より正月初連歌と九月大祭連歌の年二回の奉納を定例としてきましたが、梅花祭の日に奉納をしたのは同会としては初めての事でした。当日は神職も参列し、恒例祭典の一つ「神縁連歌奉納奉告祭」として威儀を調え斎行しました。

●「神縁連歌奉納奉告祭」までの歩み

中世～社家が行う御祈祷連歌～

太宰府天満宮は、連歌の神と慕われた菅原大神の唯一菅聖廟（かんせいびょう）として称えられ、名だたる武将、国主より多数の連歌奉納を受けていました。神社仏閣にはそう珍しい事ではありませんでしたが、太宰府天満宮に特異な点として「御祈祷連歌」が上げられます。即ち、既に出来上がった作品の奉納を受けるのではなく、願主の依頼によって社家が連歌を巻き上げ、これを奉納するのです。大友・大内・島津といった戦国大名による先勝祈祷連歌が多数依頼されています。

願いは「文化の神」のご神徳を千代に八千代に

昭和初期～途絶えてしまった月次（つきなみ）連歌～

太平の江戸時代になると庶民からも盛んに依頼されるようになった御祈祷連歌とはまた別に、神職によって営まれた月次連歌がありました。多くは二十四日神職が集まって連歌を巻き上げ、天神さまのご縁日である翌二十五日に奉納する連歌です。

明治新政府の国策によって、神道の作法は全国統一が図られ、祝詞ではなく連歌によって祈祷する御祈祷連歌は斎行しにくくなり、徐々にその依頼も減っていたようです。それでも何十年と続けられてきた月次連歌も、ついには昭和九年ごろには記録が見られなくなり、途絶えてしまいました。

昭和六十二年～後悔している、の言を受け～

昭和最後期には全国の現役最高齢神職として知られた「老権宮司」小鳥居寛二郎氏は、太宰府天満宮最後の連衆でもありました。昭和初期に途絶える直前の宗匠、松大路信充氏とは叔父・甥の関係でしたが一緒に住んでおり、お宮でも自宅でも連歌の事で怒られ、いやでいやでしょうがなかったと自伝で書いています。しかし晩年、やはり途切れさせてしまったこ

会員三橋権禰宜による披講は門内に響いて

名残表

一　東風よいざ淀む行く手を開け放て　正純　春
二　凧々あがれ児の駆けてくる　祥子　春
三　父帰る都のつとに語ること　仁美　雑
四　なごりばかりの大原の杜　純一　雑
五　見せばやな色よくならぶ苔の花　由季　夏
六　梅雨入にも描く眉根誰がため　睦　夏
七　衣の香を忘れ難きと託言して　康利　雑
八　求むる俤方違へする　隆子　雑
九　立ちのぼる竈の煙一筋に　史子　雑
十　里に響ける唐臼の音　君子　雑
十一　山眠る滅びし国の子守歌　良三　冬
十二　いささ篁時雨打つらむ　正純　冬
十三　綿入れの襟合はせつつ月を待つ　弘子　冬
十四　暮れそめたればさて酒酌まむ　由季　雑

名残裏

一　ふたつみつ鳥も森へと急ぐらし　祥子　雑
二　おしあな風に雲も千切るる　康利　秋
三　いづくより朝の砧の寂しげに　純一　秋
四　根釣りの舟の沖にただよふ　喜代志　秋
五　定まれる日に立つ市は遠からず　宜博　雑
六　並ぶ雛の顔もくさぐさ　睦　春
七　何よりも輝くばかり花心　彰弘　春
八　梅こそ匂へ開く北窓　仁美　春

西高辻　信宏　一　高橋　史子　三　栗田　純一　三
三橋　彰弘　三　遠藤　喜代志　三　有川　宜博　二
森　弘子　三　城戸　睦　三　長谷川　隆子　二
城戸　康利　三　白石　君子　三　川口　仁美　三
村上　良三　三　梅野　祥子　三
宮崎　由季　三　西田　正純　三

（令和四年二月十四日満尾）

とを後悔していると漏らしていたそうです。このことを聞いていた有川宜博氏（現、神縁連歌会宗匠）をはじめとする当時の研究所職員（元職も含む）によって、第三十八代西高辻信貞宮司の一年祭を期に、昭和六十二年、神縁連歌会は天満宮における復興を目指して活動を開始しました。

平成二十四年初めての奉納
そして令和二年さらなる未来へ

活動開始と言っても当時実際に連歌をしたことがある者はいませんでした。有川氏は唯一奉納連歌が古来連綿と続けられていた行橋市須佐神社の高辻安親宮司を尋ね教えを請い、また連歌会所が唯一現存する大阪杭全神社をはじめ全国を渡り歩き、島津忠夫先生や浜千代清先生と言った名だたる連歌研究者と交流を深め、神縁連歌会を立ち上げられました。そうしてついに、平成二十四年九月大祭の連歌奉納を皮切りに、年二回の定例奉納へと活動は高まったのです。

また、この機運を次世代へ継承することを目的の一つとして、令和二年、改めて会員組織を立ち上げたのが今の「太宰府天満宮神縁連歌会」です。

〔編集部〕

森羅万象の世界を天神さまへ

会員募集

定例会
・年六回（原則奇数月）
・内、年二回神前奉納
（一月初連歌・九月秋大祭）

会員種別
・正会員
・賛助会員
（毎回参加が難しい方向け）

連歌実作を重ね、年二回の奉納を行っています。未経験者の為の練習会もご紹介できます。

詳しくは事務局（文化研究所内）までお問合せください。
電　話：０９２（９２２）８５５１
メール：
kenkyusyo@dazaifutenmangu.or.jp

崇敬会だより

書の神様

御祭神菅原道真公は「書の三聖」と称えられ、菅聖廟太宰府天満宮は書の聖地として時代を超え篤く崇敬されています。また、江戸時代には手習いの神として寺子屋に菅公の掛け軸が掛けられるようになると、転じて子供の守り神として信仰され、多くの先生方に書に関する神事催事をご協力いただいております。

第三十七回新春献書祭

令和四年三月二十一日、太宰府天満宮献書会によって今年も書初め作品の奉納を執り行いました。献書会役員の先生方が、各お教室を通じて子供から大人まで、実に一、六四九点もの書初め作品を集められ、御神前に敬神の誠を捧げました。

この新春献書祭の特徴は、作品に優劣をつけず、また誰に見せるでもなく、ただただ道の上達と隆昌を願って天神さまにのみ作品をご覧いただく点にあります。ご奉納いただいた作品は、御本殿の奥深くへ納められ、翌年お焚き上げを致します。

新春献書祭（春分日）役員の先生方が集めた多数の献書

第一回日本習字オンライン書き初め大会作品奉納式

令和四年一月二十六日、日本習字教育財団の皆さまにより、書き初め作品約三〇〇点の奉納式が初めて執り行われました。国内外の習字教室やご自宅をオンラインで繋いだ同大会の奉納作品は天神さまにのみご覧いただくもので、審査はありません。日本習字に学ぶ皆さまにとっては経験した事の無い形式の書き初め大会になったと思います。崇敬会本部としても、これからの盛り上がりに全面的にご協力させていただきたいと思っております。

日本習字に学ぶ皆さまの作品初めての献上

七夕揮毫会

毎年八月一日から三日間、幼稚園から中学生までの子供たちによる七夕揮毫会の席上揮毫が行われます。日頃の成果のすべてを表現しようと、毎年多くの参加をいただいております。提出された作品は、審査より前に御本殿に献書し、天神さまのご高覧にあずかります。先生方のご協力により長年続けられ、令和四年には七十三回目を予定しております。

七夕揮毫会（平成28年のようす）真剣そのもの

神前揮毫と筆塚祭

九月第一日曜日、先に開催の七夕揮毫会において、各学年の最優秀者を招いて御本殿での「神前揮毫」、並びに使い古した筆に感謝とさらなる上達を願って「筆塚祭」を斎行致しております。七夕揮毫会は中学生までの大会ですので、当然大人は御本殿で揮毫できません。このような神事が続いているのも、書の神様、子供の守り神と天神さまを慕う先生方のご尽力によることは言うまでもありません。

筆塚に収める古筆は、年間通して受け付けておりますのでどうぞご遠慮なくお持ち下さい（祈願受付所にてお預かりしております）。

表彰者による神前揮毫（令和３年のようす）

古筆に感謝を捧げる筆塚祭（９月）

残菊の宴

十一月二十三日、東神苑の文書館に於いて平安時代から太宰府天満宮に伝わる「四度（しど）の宴」の一つである「残菊の宴」が催されます。「墨書の儀」では祭壇にお招きした道真公の御神前で先生方による神前揮毫が行われ、その場で和やかにも楽しく作品解説をいただきます。現在の「残菊の宴」は戦後に再興したもので、令和四年十一月二十三日には三十九回目を予定しております。

残菊の宴（１１月）和やかに楽しい作品鑑賞

役員委嘱

崇敬会支部並びに皆さまのお世話をしていただく役員の委嘱が左記の通り行われました。何卒ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

那珂川連合会（副会長）	結城和幸
那珂川連合会（監事）	宮嶋文洋

（順不同敬称略）

有朋 ～広がる信仰の輪～

このコーナーでは、崇敬会法人会員の皆さまを尋ねてご紹介いたします。

第二回　株式会社 薬師堂

（筑紫野市）

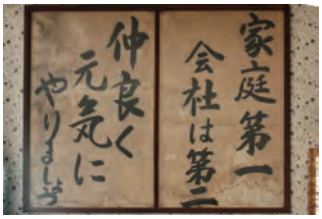
創　業：昭和四十六年（母体会社から）
御入会：平成二十九年十二月十七日
創業者：直江昶氏
現社長：直江和代氏
モットー：「家庭第一　会社は第二　仲良く元気にやりましょう」

主な業務内容

健康食品「梅雲丹」、スキンケア化粧品「ソンバーユ」の販売元。固有名称の無かった「馬の油」を「馬油（ばぁゆ）」と名付けた事でも有名。真面目にコツコツやりなさいとの創業者一家の教えを守り、高品質な製品づくりと丁寧な応接対応で長年ファンから愛されている。

旧厚労省の認可の都合で法人としては製造と販売を分けているが、グループは五十年以上真摯に活動を続けている。

「馬油（ばぁゆ）といえばソンバーユ」の薬師堂



良い物を作り、気持ちよくお届けするために

今回は株式会社薬師堂の高橋光晴取締役、中島望営業企画室室長のお二人と、筑紫野連合会の森木優元前会長にお話をお伺いいたしました。

◆家庭の心配事は解決してから出社していらっしゃい

社員食堂には、創業者である直江昶（とおる）氏の「家庭第一　会社は第二　仲良く元気にやりましょう」の言葉。不安事を抱えたままではお客様に本当に良いものをお届けできない、という教えなのだそう。「夫婦間で問題があれば、出社しなくていいから解決してから来なさい、という事例もありましたね。和代社長は従業員をさながら子供の様に大切に思っています。」と高橋氏。

◆人に紹介したくなるような創業者直江昶氏

薬師堂さんは、森木氏のお誘いで崇敬会にご入会いただきました。「直江昶という男は、ユニークな人だったね」と森木氏。なんでも自分の体で試してから本当に良いと思った物しか人にお薦めしない方でした。

元々馬の油を売りだしたきっかけも自らの大やけどの経験によるのは、薬師堂さんのHPに詳しく紹介されています。

三階のお堂では愛を見ました

使ってみて肌に良いものだったから、ぜひ皆さんにも、との一心だったそう。「話も上手くて、何度聞いても飽きなかった。人を引き付ける魅力があったね」と森木氏は続けた。実は馬の油は当初化粧品としては認可されず、「食品」の分類だった。梅雲丹を売りながら、これも良いものだからと昶氏は自ら全国を渡り歩いたのだそう。「「ばぁゆ」の事はよくわからないけれど、このおじさんが言うなら塗ってみてもいいかも、と思ってもらったみたいです」と中島氏。

そして、試した方がどんどんファンになっていく。昶氏はよくお客様へお手紙を書いておられ、これがまた人気があったそうで、「ラブレターが届くんですよ」、と教えていただきました。

◆社屋三階には、愛にあふれたお堂がありました

ここまで人を引き付ける昶氏は、社屋三階の「薬師院観音堂」で元気で長生きしましょう会を主宰し、説法をしておられたそうです。「もう亡くなって何年も経ちますが、消さずに残してあるんです」と黒板に昶氏の文字を見せて下さいました。人を愛し、人に愛される、そんな人の和が詰まった薬師堂さんの秘密を読者の皆さまにも、ご紹介させていただきました。

太宰府天満宮崇敬会ご入会のおすすめ

～天神さまとつくる社会～

天神さまの「誠心（まことごころ）」をいただき、より良い地域、社会、国づくり、広くは世界平和への貢献に努める崇敬者の集いです。志を同じくする会員同士交流を深めながら活動しています。

年会費

・正会員　三、〇〇〇円
・家族会員　二、〇〇〇円
・名誉会員　一〇、〇〇〇円
・法人会員　三〇、〇〇〇円
この他、国際奉仕婦人部・青年部を募集しています
（部会費　一、〇〇〇円）

～未来を担う青少年育成～

天神さまは学問はもとより「子どもの守り神」としても愛されております。

「青年部」では空手・柔道・剣道・弓道の他吹奏楽に日々勤しみ自己の修養に励む少年少女の活躍を応援し、（公財）太宰府顕彰会の主催する各種大会に協力しています。

天神さまと触れあう

お問い合わせ、お申し込み先
崇敬会本部
☎092-922-8484

次の一歩へ～崇敬会福島支部の決意～

太宰府天満宮崇敬会福島県福島支部
副支部長　関根　英樹

令和三(二〇二一)年十二月十一日、崇敬会福島支部(支部長・篠木雄司、事務長・今関達也)の二回目の総会が福島県福島市のザ・セレクトン福島で開かれました。「オミクロン」が猛威を揮う直前だったため、新型コロナウイルスの感染者数も落ち着いていて約三十人が集いました。「支部発足後初の正式参拝を令和五(二〇二三)年二月に実現する」とする新年度事業計画を決め、支部会員は天満宮に思いをはせました。

崇敬会福島支部総会設立を祝う関係者（令和２年11月29日）

福島県に東日本初の支部発足 ―崇敬会

太宰府天満宮崇敬会福島県福島支部は前年の令和二(二〇二〇)年十一月二十九日に発足しました。太宰府天満宮崇敬会の正式な支部としては広島県以東で初めてだったそうです。設立総会は、天満宮から松大路信潔権禰宜と神苑管理部の古賀義悟さん、中島紀寿さん、新垣力さんが福島市を訪れるのに合わせて設定しました。四人は天満宮から福島県立福島高校に恵与された五本の梅の若木の剪定のため来福してくれました。天満宮の前の権禰宜で神苑管理部長を務めていた佐賀県武雄市の潮見神社宮司の毛利清彦さんも一緒に足を運んでくれました。

福島県福島支部 令和五年二月に正式参拝へ

設立メンバーは天満宮からの梅の若木の恵与に携わった福島高校卒業生が中心でした。規約の第三条の「目的」には「本会は、太宰府天満宮の御神徳を奉戴し、敬神崇祖の念を推進し、家庭の平安と地域社会の発展に寄与するとともに、福島県立福島高校に太宰府天満宮より恵与された梅の若木につながるご縁を未来に伝え、つなぐことを目的とする」と掲げています。福島高校卒業生以外にも是非、入会したいという人もいたため、卒業生にこだわらない支部を目指すことになりました。

コロナ禍の中での設立総会でしたが、来賓を含めて約五十人が出席し、和やかに支部の立ちあげを祝いました。

令和三年度総会であいさつする毛利顧問（令和３年12月11日）

コロナ禍は翌年も続き、社会は不透明さを増していましたが、結成二年目の令和三年度総会も無事に開くことができました。発足当時の会員数は三十三人でしたが、第二回総会の時は五十二人に増えていました。

二年後の参拝日程は、菅原道真公の御命日である二月二十五日前後を目標にしています。

きっかけは福島高校同総会 有志参拝団

支部設立のきっかけは、その二年前の平成三十(二〇一八)年にさかのぼります。福島県立福島高校同総会有志が太宰府天満宮参拝団を組織し、二十一人が天満宮を訪れました。一行の目的は福島県立福島高校に五本の梅の若木が恵与されたお礼参りと天満宮との交流への感謝、そして未来へ続く絆をさらに深めることでした。

一行は二月十一日の紀元祭(建国記念日祭)に参列し、既に献梅で植えられていた「福高(復興)の暁」の隣に新たに貴重な梅の品種の若木を献梅させていただきました。

天満宮関係者の温かい歓迎の中で参

加者は崇敬会の存在を知りました。感銘を受けた団員の多くが個人会員として入会することになりました。

その後、福島に戻った団員らは正式な崇敬会の支部を福島の地に発足させようと考えるようになりました。天満宮神徳宣揚部の田中教介部長の教示をいただき、規約など必要事項を詰めました。ただ、新型コロナウイルスの影響もあり、正式発足までにほぼ二年を要しました。

規約では役員の中に顧問と相談役を設けています。相談役には福島高校同総会の渡辺健寿前会長、渡辺又夫元副会長、そして顧問に天満宮と福島の橋渡しに尽力していただいた毛利清彦潮見神社宮司、丹治正博福島稲荷神社宮司をお願いしました。

福島高校正門わきにある五本の梅恵与の記念碑

平成の飛梅物語が結ぶ 奇跡のご縁

それでは、そもそも何故、千キロ以上も離れた九州の太宰府天満宮と東北の福島市にこのようなご縁ができたのでしょうか。

発端は平成二十三(二〇一一)年三月十一日に発生した東日本大震災とそれに続く東京電力福島第一原発事故にあります。

福島県福島市にあり県内屈指の進学校である福島県立福島高校も大変な被害に見舞われました。四棟ある校舎のうち二棟が倒壊の危険で使えなくなりました。さらに原発事故で原発立地町村の避難住民の一部が福島高校の体育館で避難生活を始めました。

半月遅れで入学した新入生は、体育館を仕切った教室で高校生活が始まりました。仮設校舎が作られましたが、校舎の再建には三年を要しました。そこには震災と原発事故の中、不安で不自由な高校生活を強いられながらも必死で学業に打ち込む高校生の姿がありました。

そのような状況下にある後輩に、同校のOBは「伝統ある福島高校で学んだ誇りを忘れないで巣立ってほしい」との思いを強めました。その中心となって動いたのが、震災前後で母校のPTA会長を五人輩出していた同校高校三十三回卒(昭和五十六年卒・燦々会)のメンバーでした。

太宰府天満宮を訪れた福島高校同総会有志による参拝団
(平成30年2月11日)

福島高校の校章は「梅花」です。梅はよく厳寒風雪に耐え、百花に先駆けて開き、その高尚優美なさまは他の花の遠く及ばないところであるとされています。生徒は梅章の教えとして「清らかであれ、勉励せよ、世のためたれ」を心に刻みます。

燦々会のメンバーは後輩に「梅章の教えを忘れないでほしい」と、校舎再建にあわせて新たにできる中庭に梅の苗木を贈ろうと考えました。すべてはここから始まったのです。

苗木の話はいつのまにか「未曽有の震災と原発事故を乗り越え、未来に歩む生徒のために是非日本一の梅の木を送ろう」という無謀な願いに変化していきます。ところが、その不可能なはずの思いは、天神様に導かれたのでしょう。不思議なご縁にご縁を重ね、太宰府天満宮の西高辻信良宮司(当時)の耳に届きます。

西高辻宮司の英断が、ありえないはずの願いに一条の光をそそぎます。天満宮の神苑で育てられた梅の若木五本が、正式に福島高校に恵与されることになったのです。

震災から三年後の平成二十六(二〇一四)年二月二十日、千四百キロの道のりを飛び越え、福島高校の正門の庭に梅の若木五本が植えられました。平成の飛梅物語の始まりでした。

太宰府天満宮崇敬会福島県福島支部は、これからもこの平成の飛梅物語をしっかり受け継ぎ、未来へつないでいきます。

太宰府天満宮崇敬会福島

2023年2月公式参拝へ

発足後初

太宰府天満宮崇敬会福島支部の総会は十一日、福島市のザ・セレクトン福島で開かれた。支部正式発足後初の公式参拝を二〇二三(令和五)年二月に実施することを決めた。

三十人が参加した。

篠木雄司支部長、渡辺健寿相談役らがあいさつした。会員は再来年、菅原道真公の命日に当たる二月二十五日に行われる大祭に合わせて、訪問団を設ける予定。

記念講演が行われ、元太宰府天満宮権禰宜(ねぎ)で、佐賀県武雄市・潮見神社宮司の毛利清彦顧問が「梅の話」と題し講話した。

天満宮内の梅の名前の由来などについて説明した。

同支部は東日本大震災後、太宰府天満宮から福島高に梅の若木五本が恵与され、その後続いた交流をきっかけに、東日本で初めて福島市に設けられた。

記念講演をする毛利氏

崇敬会福島支部第二回総会記事(福島民報)

飛梅講社だより

「飛梅講社」とは、天神さまのみあとを慕って飛んできた御神木「とびうめ」の名にあやかって、結集命名された信者崇敬者の集いです。

飛梅講社大祭

二月二十四日、二月二十五日

24日代表玉串　厳かに頭を垂れて

25日代表玉串　天神さまの御神霊（おみたま）をお慰めし

陽春の柔らかくも抜けるような晴天に恵まれた両日、御神忌一一二〇年にあたり、天神さまを慕う皆さまの益々のご繁栄とご平安をご祈願いたしました。本年も新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、皆さまの安全と安心を最優先に考え、代表者のみ、少人数でのご参拝をお願い致しましたところ、ご理解とご協力を賜りました事深く御礼申し上げます。

二十四日ご参列の皆さま▽甘木連合▽唐津鏡▽博多区東平尾▽太宰府坂本▽早良区内野▽他個人の皆さま

２４日ご参拝の皆さま　御神木の香りと共に

二十五日ご参列の皆さま▽二十五日会▽筑穂連合▽他個人の皆さま

２５日ご参拝の皆さま　天神さまのお側で

各地よりお届け頂きました

※他にも多くの方にマスク等感染対策をいただいた上で代表参拝をいただきました。皆さまが安心してお参りいただける日常を願ってやみません。

敬神の誠をささげて

支部探訪記

多久天満宮（飯盛康登支部長）

昭和五十四年七月建立の多久天満宮（佐賀県多久市北多久町）は公民館の敷地に鎮座し、御社殿と共に御神木が大切に守り伝えられています。

康登現支部長のお父様が太宰府天満宮に頼み込んで、昭和五十五年、御神木の一枝をいただいたものを大切に育て、今に伝わります。当時は原付の免許しか持たなかったので、国鉄と西鉄を乗り継いで太宰府まで

通い詰めていたようです、と当時の思い出を語っていただきました。

梅の木は柵と注連縄に囲われ、御神木に相応しい設えで地域の皆さまに愛されています。多久に移植した当時は揮毫した立て札でしたが、年月が経ち、さすがに字が判読できなくなってきたので今立っているものは二代目の立て札、今度は彫を入れてあります。

今現在、お世話なさる役員の皆さまのほとんどは多久天満宮建立当時の皆さまから代替わりした世代。先代からの教えを大切に守り、今も毎年の御本社参りを欠かしません。太宰府へご参拝の折には、区内の受験生の合格祈願を受けられ、多久に戻って本人へ手渡します。正月と七月の祭礼行事もコロナ禍で縮小を余儀なくされていますが、今年も区長さんから受験生への手渡しは欠かさなかったそうです。

多久天満宮と注連縄を張られた御神木

飯盛康登現支部長と太宰府へ通い詰めた先代（右から２番目）

公民館に掲げる授与の「証」（写し）原本は飯盛家金庫で大切に保管

飛梅講社役員委嘱

講員の皆さまのお世話をしていただく新役員の委嘱が左記の通り行われました。何卒、宜しくご尽力賜りますようお願い申し上げます。

役職	氏名	住所
支部長	西田　幸生	嘉麻市平
〃	結城　一郎	古賀市米多比
〃	山崎　謙次	糸島市志摩新町
〃	小島　俊明	朝倉市小田
〃	青木　政澄	糸島市二丈福井
〃	安武　秀昭	古賀市新原
〃	大澤　和彦	朝倉市筑前町石櫃
〃	安達敬一郎	糸島市志摩新町
〃	濵地　稔	福岡市西区元岡
〃	井本　弘実	伊万里市波多津町木場
〃	中村　紀子	福岡市西区小田
〃	田中　繁安	唐津市厳木町星領
〃	皆良田定治	小城市牛津町勝
〃	中原　和人	糸島市志摩新町
〃	鶴田　久和	唐津市七山木浦
〃	松井　國昭	小郡市吹上
〃	笠　守	糸島市西堂
副支部長	鳥巣　貴之	糸島市二丈武
〃	安武　昇	古賀市新原
〃	池　隆志	糸島市志摩野北
世話係	井浦　嗣郎	糟屋郡篠栗町尾仲
〃	藤波　夏江	糸島市志摩野北
〃	楢崎　博明	糸島市志摩新町
〃	佐田　浩	太宰府市観世音寺

（順不同敬称略）

神と暮らす

天満宮（とびうめこうしゃ）飛梅講社ご入会のおすすめ

～新しい気持ちで新年を～

年末に新しいお札・暦をお送りいたします。

年末には家中を大掃除し、お神棚を清め、お札を新たにして、清々しく年神様を迎えるのが古くからの習わしです。

ご遠方でお参りが難しい方にも、毎年「天満宮のお札と暦」をご送付いたします。

～天神さまと過ごす一年～

お誕生日当日早朝、「誕生祭」を斎行いたします。

毎朝のお供え「御日供祭（おにくくさい）」に合わせて、お誕生の佳き日を迎えられた皆さまのお名前をお読み上げいたします。

天神さまのご神徳をより一層いただかれ、ご健康とご長寿をお祈りいたします。

その他、各種祭典行事のご案内をお届けいたします。

詳しいご案内・申し込み用紙ご送付のご用命は飛梅講社本部（神徳宣揚部内）〇九二（九二二）八四八四

天神の杜ハイライト

鷽替え神事

「鷽替え神事」は鬼すべ神事に先立ち、十八時より天神広場にて斎行されました。参列者が実在する鳥“鷽（うそ）”を象った木うそを互いに取り替えることで、一年間の嘘を天神さまの誠に替え、今年一年の幸せを祈念する神事です。

鬼すべ神事

「鬼すべ神事」は追儺祭（ついなさい）という災いを払う年中行事の一つであり、寛和二年（九八六）に道真公の曾孫である菅原輔正（すがわらのすけまさ）によって始められました。災難消除、とくに火除けと招福を祈って斎行される勇壮な火祭りの神事です。氏子の方々が“鬼係”“警固（けいご）”“燻手（すべて）”“松明（たいまつ）”の各所役に分かれ、「鬼じゃ、鬼じゃ」の掛け声とともに斎場の鬼すべ堂に集まります。堂前に積み上げられたワラや青松葉に忌火が点火されると瞬く間に炎が燃え上がり、立てこもる鬼を大きなうちわで燻り出す燻手（すべて）と、棒で板壁を打ち破り煙を出して鬼を守る警固（けいご）との激しい攻防戦が繰り広げられました。

梅花祭

天神さまの御神忌（御命日）にあたる二月二十五日、梅の香りに包まれた御本殿にて「梅花祭」が斎行されました。天神さまがこよなく愛された梅花と古来より伝わる特殊な神饌がお供えされ、巫女による神楽「飛梅の舞」が奉奏されました。

節分厄除祈願大祭

厄とは災難や障りが身に振りかかりやすくなると言われる人生の節目のことであり、忌み慎む習わしがあります。節分に当たる二月三日、御本殿にて「節分厄除祈願大祭」が斎行され、祭典後天神ひろばにて「豆まき神事」が執り行われました。

曲水の宴

三月六日、美しく咲き誇った梅花のもと、平安時代の宮中行事を再現した「曲水の宴」が斎行されました。衣冠束帯・十二単など平安装束に身を包んだ参宴者が、曲水の庭の上流より流れてくる酒盃が目の前を通り過ぎる前に一首を短冊にしたため、盃を飲み干す禊祓いの神事です。琴の音や和歌朗詠の声が優雅に響き、平安絵巻そのままの雅な宴となりました。

曲水の宴

顧問　味酒　安則

太宰府天満宮は創建されてより、九州文化の核の一つとしてその役割を担ってきました。その典型的なものが、宮中四宴いわゆる四度宴の始行です。この京洛の祭事は、大宰府政庁に先ず以て移入され、さらに天満宮へと転移されました。その時期はというと、承平・天慶の乱（九三一～九四七）後、政庁の権威が衰微し始めるころになります。このことは、大宰府政庁の祭事文化が、天満宮の菅公を追慕する祭祀、宗教文化として新たに始行されたことになります。

四度宴の中でも最初に移入されたのが「曲水宴」でした。曲水宴は「きょくすいのえん」とも「ごくすいのうたげ」または「めぐりみずのとよのあかり」ともいわれています。三月上巳、後に三月三日に、水の流れのある庭園で、その淵に参宴者が座り、流れてくる盃が自分の前を通り過ぎないうちに詩歌を詠み、盃の神酒を戴き次へと流し、その詩歌を披講（読み上げること）する宴、祭事であります。

曲水宴

古代中国では、三月の上巳に水辺で穢れを洗い清める習俗があり、それに「流觴曲水」という盃を曲水に流す儀式が加わりました。それが泰の昭襄王の時代といわれます。また、四世紀、晋の時代、三月三日、会稽山麓の蘭亭で書家の王義之が名士四十一人と曲水宴を催し、その際詠じられた漢詩集の序文の『蘭亭序』は有名です。

日本では、海や川や滝など水辺で禊をして罪や戯れを祓う神事が古来よりあり、この習俗に合体したと考えられます。『日本書紀』によると、顕宗天皇元年（四八五）上巳に宮中儀式として後苑で行われたとあり、これが初見です。その後、『続日本記』に聖武天皇の神亀五年（七二八）三月三日、鳥池塘に出御され、文官を呼び寄せ曲水宴をされています。『万葉集』でも大伴家持が、天平勝宝二年（七五〇）三月三日、自邸で催した私的な曲水宴で詠んだ和歌を記しています。平城天皇は、御父母が薨じられた三月の宴を嫌われたために、曲水宴は一時停止されましたが、次の嵯峨天皇の御世には復活したといわれています。

宇多天皇の寛平二年（八九〇）、菅原道真公が四十六才の時に雅院（桂殿）で催された曲水宴に参宴された時、七言律詩を詠まれた中に、

遙想蘭亭晩景春

とあり、道真公が王義之の『蘭亭予』をご存じであったことが判ります。また、翌寛平三年三月三日の曲水宴でも詩作の大序に、

曲水雖遙、遺塵雖絶、書巳字而知地勢、

とあるのも、やはり王義之の開いた曲水宴を指しています。因みに、遺塵とは古えの賢人のことで王義之を指し、巳字とは曲水（宴）の洒落た形容です。

太宰府天満宮で初めて曲水宴が催されたことは『天満宮安楽寺草創日記』（重文）に記されています。

四度宴　曲水

天徳二年戊午三月三日、小野好古始之

大宰大弐小野好古が始め、これは、大宰府官人が天満宮と直接的関係をもつ最初の例となりました。後に好古は、祭事の経済的支援として、酒殿庄や土師庄を寄進しています。太宰府天満宮の安楽寺領は、九州全域にわたり、そのほとんどが寄進地茶庄園であったといわれてます。次の十一世紀に、太宰府天満宮が急速に発展する契機となったのは、この大宰府官人の天神信仰によるものと考えられます。

好古は、承平・天慶の乱の追捕使として武名が高いのですが、勅撰集記載の歌人でもあり、三蹟の道風は実弟になります。

小野氏　岑守―篁―葛絃―好古
　　└道風

岑守も篁も平安初期を代表する漢詩人です。葛絃は、道真公の大宰府謫居時代前半の大宰大弐で、「前右大臣の処置が重過ぎる」ことを朝廷に上表した人で、代わった後半の大弐藤原興範は逆にさらに厳しく対処しています。この小野氏の子孫は、太宰府天満宮の社家の文人として永代にわたり仕えました。

江戸時代の福岡藩の大儒学者、貝原益軒は『太宰府天満宮故実』の中で、

……乱世と成しより以来、四度の宴も絶えて久敷行はれず、今は只、七夕の和歌会のみぞ残り侍る

とあり、応仁の乱の頃より久しく絶えていたと考えられます。

それが、昭和三十八年（一九六三）三月十七日西高辻信貞宮司によって、文書館横の曲水の庭で復活しました。昭和五十五年（一九八〇）には九州大学の加藤退介教授によって本格的な「曲水溝」が造られ、令和四年（二〇二二）は再興して五十八回目の宴となります。

文の宮とも仰がれる太宰府天満宮の曲水宴をはじめとする四度宴は、貝原益軒が同じく『故実』に言うように、

此御神は、きわめて風雅におはしましければ、神の御心をなぐさめ参らせん為

とあり、天満天神へ献歌もって慰め、追福、法楽することが第一義でした。曲水宴という文化は同じでも、中国は酒宴で日本は歌会が主体にあったのです。

※参考文献
『とびうめ第四十四号』所収「曲水の宴」
太宰府天満宮

ご案内

更衣祭

四月二十日、花冷えも過ぎた境内が宵闇に沈む中、天神さまの冬の御衣「綿入りの袷物」を、夏の「羽二重の単物」へお召し替えされる祭典、更衣祭が斎行されます。柳行李（やなぎこうり）に納められた御衣は、神職の手から手へと渡し送られ、雅楽の音色響く厳かな雰囲気のもと、御内陣の奥深くにて宮司により奉じられます。

天神さまがお召しになられた「御衣」そして御神木飛梅の「実」、この二点により奉製されますのが、古来より一生一代の御守として信仰される「飛梅守」です。

斎田播種祭

当宮の斎田では、朝夕の御日供祭をはじめ、すべての祭典・神事に供えられるお米を育てております。

その初めの神事として、五月一日、斎田でのお米作りの安全と豊作を祈念し、斎田播種（はしゅさい）祭が斎行されます。斎籾は宮司自ら苗床に蒔き、巫女に斎清水を与えられ、六月の御田植祭まで職員の手により大切に育てられます。

斎田御田植祭にて職員をはじめ氏子や地元の方々のご協力のもと苗は手植えられ、夏には風にそよぐ新緑色を、秋には黄金色に輝く姿を見せてくれます。

四月・五月・六月の祭事暦

四月

一日　月次祭・講社祭
四日　厄除厄晴れ祈願祭並びに厄晴れひょうたん焼納祭
五日　中島神社春季大祭
二十日　更衣祭
二十五日　月次祭・講社祭
二十九日　昭和祭
　　祖霊殿春季大祭

五月

一日　月次祭・講社祭並びに斎田播種祭
三日　憲法記念日祭
五日　こどもの日祭
十六日　飛梅神事
二十五日　月次祭・講社祭

六月

一日　月次祭・講社祭
十一日　斎田御田植祭
二十五日　月次祭・講社祭
三十日　大祓式並びに形代焼納祭

※祭典・行事はやむを得ず延期、中止となることがありますので、詳しくは太宰府天満宮社務所までお問い合わせください。

飛　梅　第２０２号
発行日　令和４年３月２５日
発行所　太宰府天満宮社務所
　　福岡県太宰府市宰府４－７－１
　　電話（092）922－8225
発行人　西高辻信宏
編集長　松大路信潔
編集員　石川史嗣・戸髙宗徳・三橋彰弘・味酒安儀
　　松吉保知・渡辺美和子・原田愛子・長澤彩
印刷所　株式会社　四ヶ所

本誌に掲載する文章・図表等の著作権は著作者に、史料の所有権は所蔵元に帰属します。また、掲載内容を無断で使用・転載することを禁じます。

太宰府天満宮公式ウェブサイト（多言語サイトをリニューアルしました）
https://www.dazaifutenmangu.or.jp/

太宰府天満宮公式 Instagram、Facebook、Twitter では四季折々の様々な祭典、行事をご紹介しております。

公式 YouTube チャンネルにて美しい動画をお楽しみください

太宰府天満宮のいまをInstagramで